
ポケットモンスター ~とある人外達の奮闘記~

林田 吾唯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ～とある人外達の奮闘記～

【Nコード】

N1941V

【作者名】

林田 吾唯子

【あらすじ】

ここはポケモンと人間が共存する世界
一見平和な社会にも存在する差別と偏見。
その対象はポケモンであり人間である異形の者達。
総称は、無い。

そんな異形に生まれついてしまった少年少女達の小さな冒険記。

プロローグ

ここは私達の世界と表裏一体な、いわば明るい日常の暗部。

私達は日常的にポケットモンスターという生き物と共存して生きているがその中にもポケモンであり人間でもある生き物がいる。公にされたことがないため公式な総称はなく、様々な呼び方が存在する。彼等の外見は私達人間とさして変わりはない。私達と同じものを食べ、同じように寝て起きて、同じようにポケモンを使役する。では何故総称が存在せず、公にすらなっておらず、暗部と称されているのだろうか。それは彼等と私達の間にある一線。彼等はポケモンと同じく進化し、ポケモンと同じくそれぞれのタイプに見合った力を使うことが出来るのである。そんな生物は無論、危険とされ、遠ざけられるのが世の常。だが彼等に非はあるのだろうか？

此度語るのそんな公にならない生き物の物語。

プロローグ（後書き）

小学五年生の頃に書いていたポケモン漫画をノベライズしました。流れるにはシンオウ地方から南へと進んでいくつもりです。因みに主人公の親事情は単にいないということの言い訳的な？

来訪者（前書き）

主人公紹介的なコレ

日常の転機的なソレ

ネーミングセンスがアレ

来訪者

突然だが、私に親はいない。

私達、異端の人生は母体の胎内で突然変異的に始まるからだ。

おなかを痛めて帝王切開までしてこの世に送り出した子どもが私とあつては気の毒な感情がわからないわけでもない。

生んだ瞬間に医者が告げた言葉により私の母は疲労とショックでストレス性ショック死したのだ。

父はそんな私の出生を聞くやいなや父親になることを放棄して母の後を追った。

私の出生に意味は在ったのだろうかと思つたと哀感と罪悪感で潰れそうになる。

だから私の家族は父のモンスターボールにいたこのポツチャマだけだった。幸い私のポケモン部分はポツチャマなので対話だつて成立する。それがせめてもの救いだつた。

そんな私も、今日で十歳の誕生日を迎える。かといって私の日常にたいした影響は存在しないのだが。

『ヒヨウ、今日でヒヨウは人間の十歳になるんだよね？二分の一人だよな？』

「ちやま、それは違うよ。私は人じゃない。だから成人もないの」
『そうなんだ：あ！ねえヒヨウ、今日はヘンにおうちのまわりのナエトル達がざわざわ。炎タイプのポケモンとか、滅多に來ないモノが來るときみたい。ボクもザワザワそわそわ！』

彼は私の気持ちを切り替えようとしてくれているのか。気を遣わせてしまつてなんだか申し訳ない気分だ。だが彼の言っているナエトルの異変も気になる。私達が住んでいるのは湖畔のツリーハウス。それこそ炎タイプやニンゲンなどが來ることは滅多にない。あるとすれば両者とも迷っている場合のみだ。それにナエトル達は他のポケモン達が感知しづらい湖の異変、環境の変化を敏感に察知する。

信用するに越したことはないだろう。なんたって草タイプ、植物なのだから。

来訪者（後書き）

主人公の容姿：水色の内巻きの髪（肩まで）。ポツチャマの首元の襟の付いた膝丈ワンピース。裾、袖口は群青のふちどり。黄色の靴を脱がない。目の色 水色。肌がもの凄く白い。

まさかのバトル展開www（前書き）

何故こうなってしまったかなんて私には分からない。

小学五年生の頃の私に聞かないと分からない。

だって現在中学生の私はその頃のカオスな漫画を読み返してノベライズしてるだけだもの…

まさかのバトル展開WWW

『ヒョウウ！見て！』

ポツチャマのちゃまが言うが早い。私が様子聞きに行こうとしたナエトル達が一斉に森へ走り出す。

「ちゃま、おいで」

私はちゃまと共に茂みに身を潜め、戦闘態勢に入った。

「おい葉矢ツクヨ、こつちであつてんのか？オレここで戦うのは嫌だぞ」

「俺がいるよお。それに反応はちゃんとここ付近だよ。ルイちゃんの発明品を疑った事がない剛毅ゴウキにしてはえらく弱気だね」

「だつてアレだろ？ポツチャマだろ？オレ炎だぜ？勝算なんて」

「俺の事馬鹿にしてるよね？俺の葉っぱカッターの命中率知ってるよね？」

私達の目に入ったのは二人の少年。歳は私と変わらないだろう。だが私が一番驚いたのは…”彼等が私と同じ”であること。

『ヒョウウ、この人達』

「分かつてる。でも用心して、無害とは限らないから」

『うん…』

<ガサツ>

いけない！後ろにまだ残っていたミノムツチが私を見て動いてしまった！

「っ！おい葉矢！」

「うん、確かこつちの方で物音はつからと同胞の反応が」

二人が近づいてくる。もはや私に選択肢など残されていなかった。

「ちゃま、つつく！」

「うわあっ！」

私のちゃまが葉矢と呼ばれた少年を私が茂みから私に投げ上げられた勢いを加算させてつつく。草タイプと思われる彼には有効なはず

だ。

「おまえっいきなり何をッ?!」

剛毅という少年が言い終える前に私は跳び上がり、空中にて彼にバブルこうせんを放つ。目くらましには十分だったであろうか。

「くっ・・・」

予想以上のダメージを与えることに成功したらしい。なら彼はこれで当分動けまい。

さて、葉矢の方はというと

「痛かったじゃないか。彼は強いポツチャマだね」

そう言っただけは戦闘不能になったちゃまをそつと草むらに寝かせていた。

彼は、剛毅という名のヒコザル少年よりは強いようだ。

「そうだね、自己紹介でもさせてもらおうとするよ」

いや、しなくてももう名前は割れてるぞ？

まさかのバトル展開www（後書き）

容姿説明

ナエトル的な少年：土色混じりの若葉色の髪。温和しそうな印象。
目の色 黄色。袖口とかが黒い土色のジャケットト＋深緑の長ズボン。

ヒコザル的な少年：赤茶けた色の髪。荒っぽい感じ。目の色 朱。
茶色のリストバンド＋裸足＋襟と袖が赤く、胴の部分が黄色いTシ
ヤツ＋茶色の長ズボン。

レッツ ヘッド アウツ フロム デイス フォレスツ(前書き)

ちなみに前々話で名前だけ登場したルイちゃんはレアコイルの女の子だったと思います。

サブ翻訳『この森から抜けだそう』

レッツ ヘッド アウツ フロム ディス フォレスツ

「そうだね、とりあえず自己紹介でもさせてもらおうとするよ」「いや、しなくてももう名前は割れてるぞ。」

「俺は戊葉矢、じちのあつじん分かつてるとは思っけれどナエトルの異端者。そこでうめいてるヒコザル君が？ほむじのユウキ桎剛毅、君は？」

相手方も名乗っているので私もとりあえず、礼節というものをわきまえて。

「私は鋼屋氷華。はがねやヒョウカ見ての通り、私のポケモン部分はポツチャマ」

「鋼屋さん、だね？俺は面倒ごとが嫌いだから手っ取り早く済ませるよ。ん？ああ、構えなくても大丈夫。信じてはもらえないかもしれないけれど俺たちは君の味方だよ」

「保証は？」

「必要？」

でもどのみち戦ったとして私に勝ち目は無いような気がする。何にせよ2対1では不利だ。

「用件は」

「殊勝だね。うん、かいつまんでいわせてもらおうよ。俺たちは君を迎えに来たんだ」

・・・は？

ヒリーヴイン アンド テイキン ア ステップ アヘッド(前書き)

唐突で意味の分からない展開については小学生時代の私に文句を
どうぞー！

サブの翻訳 『信じて一歩、前に進むこと』

ヒリーヴィン アンド テイキン ア ステップ アヘッド

そのまま私はいわれるがまま、彼等について行った。

戊つちのえの言うようにもう二度と戻ってはこれないかもしれないので私の家族として生きてきたポケモン達も連れて行くことにした。

たったの五、六年ぼっちしか住んでいない場所ではあったが、それでも住処を離れるのは少し、淋しいような悲しいような何とも言えない思いだった。

「うおっ、お前のギャラドス強そうじゃん！」

「そうだね。それに標準よりも大きい」

彼等はボールごしに私の兄妹の一人であるギャラドスのラドスに興味を持ったようだ。

「ラドスは小柄なコイキングだったからちやまも一緒によく遊んだ。気がついたら巨大化してたんだ」

誰かと人の言葉で話すのは久しぶりで、饒舌には話せなかったけれど昔の感覚を思い返す感じが少し心地よい。

道中の半分はたわいのない話でもしていようか。

「そのポツチャマはモンスターボールに入れないの？」

「彼が意地になっている。どうしても入るつもりはないんだって」

『ヒョウだつて女の子！男二人と歩くのは危ないの！ボクが男としてヒョウを守るのっ！』

・・・いや、戦闘能力的に無理だろう。
戦闘能力といえば、そうだ。

「戊…君？」

「何？」

「あなたわたしのちゃまに勝ったでしょ？どうやって？今じゃちゃまが一番強い兄妹なのに」

私と私のポケモン達は兄妹なんだ。

小さい頃からずっと一緒に苦楽を共にしてきたんだ。

それを否定しようものなら何が何でも彼等から逃げるつもりで、あえてちゃまを兄妹だと彼等の前で言ってみた。

「うん、正直言ってこのポツチャマ凄く強かったよ。今まで見たどんなのより」

否定、されていない…？

それとも気にもとめなかったのかかは定かではないが、そんなの否定しなければどうだって良い。

私は、彼等を信じることにした。

ふと視線を下げるとその言葉を聞いて胸を張るちゃまがいて、胸に沈殿していた重々しい何か吹き飛んでしまった。

さっきまでプライドをくじかれてその挽回をしようと必死だったくせに、彼の立ち直りの早さは一級品みたいだ。

「だからさ、つつくとか、れいとうビームとかを必死に避けながらこの種を彼に投げ続けたんだ」

「何、それ」

「やどりぎのタネの改造版。養分を吸収する能力を削る代わりに根っこを強くはって相手の動きを鈍らせるんだよ」

「なるほど、確かにソレは得策。ちゃまの強さはあのすばしっこさだから」

「そんでがんじがらめになってきたところを葉っぱカッターで一発。俺の葉っぱカッターの命中率は自慢できるほどだから急所に当てて
ノックアウト
K・Oかな」

「のつくあつとって倒すって意味？」

「ああ、そうか。君はずっと世俗から離れて生きてきたんだよね」

「だからちよいちよい常識に疎いのか」

「うん、だからいろいろと教えてほしい。おねがい」

ここからside剛毅です

そう言ってさつきまでにこりともしなかったポツチャマの異端者、鋼屋氷華がこちらに笑顔を向けた瞬間、俺は一瞬硬直してしまった。それは精密機械や人形のように精巧で、制止した湖面のように澄んでいて、否、俺の知るどんな単語でも比喩しきれないほどに、言葉で表現してしまうのが無粋な行為に思えるほどに

——綺麗だった。

俺が女の子の笑顔にこうも感銘を受けたのは初めてで、こんなモノがまだこの世にあったんだとつい、惚けてしまった。

「？ほむの 禁？どうした？」

「なんでもねえよ。つーかいちいち人の顔をじろじろ見てんじゃねえよー！」

「じゅめん…」

ああっ！だからもうそんなに申し訳なさそうな顔をするな！もの凄く悪い気がするだろうが！

「じゅめん…」

「どうしたの剛毅。いつになくわたわたしてるよ？」

ヒリーヴイン アンド テイキン ア ステップ アヘッド(後書き)

途中から？ 桢君の視点でしたね。

彼、最終進化するまでザコ設定です。ご了承ください

因みに戌君は初っ端からチートです。

最早チートです。

ア シードリング オフ ア リトル ラヴ ストーリー (前書き)

剛毅君の初恋&嫉妬心

サブ翻訳 『小さな恋物語の芽』

Side 剛毅

ア シードリング オフ ア リトル ラヴ ストーリー

「どうしたの剛毅。いつになくわたわたしてるよ？」

「っせえ！つてかわたわたって何だ！わけ分かんねえ擬音使ってるじゃねえ！」

葉矢は馬鹿みたいに長い間一緒にいるから俺のちよつとした事にまで感づきやがるから厄介だ。

しかもそれが大正解だから困りもの。

「？^{ほむ}禁、わたし」

「っ तरीいから剛毅^{ユウキ}って呼べ。俺もお前のことはひよ……氷華^{ヒョウカ}って呼ぶから……」

「……わかった。剛毅、わたしはお前達と一緒にいても余り役に立たないと思う。水が倒せるのは草でも倒せる。意味ない」

「そんなこと」

「んなこたねえよ！たまに草じゃ軽すぎて岩にあまりダメージを与えられないことだってあるんだ。それにこの中じゃ泳げんのお前だ
けだぜ？」

「そう？わたし一緒にいてもいい？意味あり？うれしい！」

本当に、コイツは世俗から切り離されていなければ幸せな可愛い女の子として生きていけたんだろうなと思う。

でも同時に、異端であれたからこそ俺たちと接点がもてて、無垢で在り続けられたんだろうと考えるところにはやはり異端であることに感謝をしたい。

「あ、そうそう。剛毅が呼び捨てなら俺も葉矢^{エマツ}でいいよ。むしろそっちの方がいいや」

「分かった。葉矢！」

・・・少し、いらつとした。

何に苛ついたのかは定かではない。

嫌、多分大体薄々おおよその検討はついている。

でもそれに対して違うと言いつつ別の理由を探す、俺。

――なんか、凄く情けない。

ア シードリング オフ ア リトル ラヴ ストーリー (後書き)

バトル関係無しに剛毅君のわたわたを書くのが楽しい。

剛毅君のちっさな嫉妬心が最高に可愛い。

近々氷華ちゃんのイラストでも張ろうかと目論んでいます

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

タイトル翻訳『互いを知ることと、共に前へ進むこと』
今回、一人称視点解除

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

三人は日が暮れてきたのを確認し、手頃な高さの木に登って寝るとにした。

「あなたたち、そもそもどうやってわたしの居場所わかった？」

「このレーダーを使ったんだ」

葉矢はバッグから彼の手の平より少し大きいくらいの機械を取り出した。

「なに？それ」

「これは俺たちみたいなのをみつける機械だよ。今映ってる三つの赤い丸が俺たち」

映し出されていたのは黒地に蛍光色の緑で線を引いた方眼紙の様な画面の真ん中に三つの丸。

氷華はそれをとて簡易的でわかりやすいと思った。

「これを作ったのが俺たちの本部にいるルイちゃん。ルイちゃんのポケモン部分はレアコイルで、本名は西蘭さいおんじ磁琉るいし生子。本部で役に立つ機械を沢山作ってくれてるんだよ」

「・・・本部？組織なの？」

「ああそうさ。ま、頭が誰かは知らねえがよ」

太い枝に座り、幹を背もたれのようにして体を預けていた剛毅がぶつきらぼつに言い放つ。

「俺たちの目的は俺たちみたいなのに対する差別・偏見をなくすことと」

「うん」

「俺たちみたいなの力を欲しがって悪用しようとしている輩はたくさんいるからね、そういう奴らから同胞を保護すること、目をつけられる前に仲間に入れること、必要とあらばそういう奴らを倒すことなんだ」

「・・・ふーん」

「お前今の話、理解してっか？」

「それは分かった。私が思ったのは、私達みたいなのは居場所がなかったから、居場所がもらええると思ったらどんなヤツにだって行ってしまっつてこと。そういう気持ち、知らずにそんな同胞の^{わたしたち}人生を駄目にしようとする奴らが許せない」

「そつだよ、氷華。溺れている者、自分が溺れていると思っっている者は藁でも、それこそ毒草でもつかみ取ってしまう。だから俺たちが命綱を投げるんだ」

「ケツ。つっても俺ら、下っ端中の下っ端班だけだな」

「なんでそついうこと言うかなー・・・」

「じゃあわたし、あなたたちに付いてきて正解だった？」

「ん、まあな」

「そういう輩だけじゃなく、氷華ならほかの悪い人間にも攫さらわれそうだけどね」

「ほかの悪い人間？」

「うん。氷華、綺麗な顔してるから売られたり愛玩されたりしそうだよ。俺たちはぱつと見人間とさしてかわらないし」

「葉矢っ！お前！」

「剛毅？間違ったこと言っただかな？俺」

「っ…あーもういい！寝るぞ」

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

今回も剛毅くんのわたわたが見れた(？)ような感じですねー
ルイちゃんのリーダーはまあ、漁船についてるアレみたいなの？

インスイデント ザッツ アイ デイドウンツ メンツ(前書き)

サブ翻訳『私が意図せずに起きていた出来事』
今回も引き続き一人称視点解除です

インスイデント ザッツ アイ デイドウンツ メンツ

少し時間がたつと、氷華は自分がいた少し高めの枝から事もあろうか剛毅のいる太い枝に降りてきた。

「んなつ！」

そしてそのまま彼の下腹部あたりに頭を載せた。

「おい氷華てめえ・・・ん？」

「あつたかい…！」

人肌より少し暖かいヒコザルの異端者、剛毅の体温に惹かれて降りてきたらしい。

彼はそのまま何も言えず、黙って彼女の頬に手を添えた。

「月明かりで白く照らされて…本当整った顔してるな、こいつ」

彼の足の間にある氷華の体は湖畔での食生活を物語るかのようにほつそりとしていて、彼が少しでも足に力を入れたら潰れてしまいそうだった。

「君は人の顔をじろじろ見るどころか手を添えているじゃないか、剛毅」

「うわっ、葉矢！」

「しーっ。起きちゃっつゝ」

「……」

「剛毅って眉のラインがくっきりしててすこしきつめの女の子が好きなの？」

「っせえな……」

「やっぱり水タイプって体温低いの？」

「俺から見たらたいていの水タイプ、草タイプは低体温だったの」

「そうだったね」

「お前はナエトルだしな」

「そうだね。ねえねえ、俺も暖めてよー」

「よるな気色悪い！」

「氷華はいいのに？」

「うるせえ！」

「あはっ、冗談だよ。俺はヘンにあっついと体に良くないし」

葉矢は剛毅を下の枝から見上げ、悪戯っぽく笑う。

剛毅は彼の発言に突っ込みを入れる際も氷華を落とさないようにそつと足で支えている。

その光景は誰が見ても微笑ましいと思うだろう。

「俺たちもそろそろ寝ようか」

「だな」

「じゃ、おやすみ」

「おう」

――二人の少年は一日の疲れを癒すよう、そっと目を閉じた――

ア シンプル ブレイクファスト(前書き)

サブ翻訳『簡素な朝食』

今回も…以下略

ア シンプル ブレイクファスト

翌朝剛毅が目を覚ますと氷華と葉矢が下で朝食の準備をしていた。といても剛毅のヒコザルと氷華のポツチャマの協力を得て食べられる木の実の葉を煮込んでいるだけなのだが。

「葉矢！コイキング何匹必要？」

「あと二匹かな」

「わかった！」

氷華は木のでっぺんから見える距離にある川で彼女のものと思われるブイゼルと一緒にコイキングを捕まえている。

無論、両者とも素潜りで素手だ。

剛毅は特に意味もなく”今起きた感”を装い、木から飛び降りた。

「あの野生児嬢ちゃんは元気なこったねえ。俺なんか人の生活に慣れすぎて腰と首が痛えわ全く」

「クスツ、俺が先に起きてぼうつとしていたらさ、あの子いきなりむくつと起き上がって自分の寝てた場所を確認すると真っ赤になって木から落ちちゃったんだ」

「マジで？」

「うん。それで川に走って行ってポツチャマと泳いでたよ」

「アイツにも性差つてもんがあるんだなあ」

「葉矢ー！採ってきた…よ」

「おっ、お疲れさん」

またしても剛毅の顔を見ると頬を染め、走り出そうとする氷華の背中に向かって葉矢はすつと右手をさしのべた。

すると彼の手に沿って袖口から何かの植物が生え始め、驚くべきスピードで氷華に追いつくと彼女の細いからだを絡め取り、一気に彼の目の前まで引き戻した。

「わっ！」

「走り回るのも良いけれど、とりあえず朝食にしようか。そのコイキングも焼くからね」

「はーい…」

ア シンプル ブレイクファスト（後書き）

分かるとおり、氷華ちゃんはリツシ湖の湖畔に住んでた子です。
彼女の手持ちはポツチャマを始め、そこに住み着いてから手に入れた彼女の兄妹。

ブイゼルーいぜる

ポツチャマーちやま

ギャラドスーらどす

I t w a s w h a t I a l w a y s w a n t e d t o s a y .

葉矢と剛毅の手持ち紹介的な？

友人に、カタカナ英語読みにくいと言われたのでちゃんと書きま
した。

サブ翻訳『それは俺がいつも言いたかったこと』

今回は葉矢君視点です。

It was what I always wanted to say .

朝食を済ませた俺たちはコイキング達の骨を魚ポケモンの供養よろしく川に流した。

綺麗な水に少しずつ流されながら沈んでいく彼等の骨を感謝と慈しみの目でみつめる氷華は年齢にそぐわない綺麗さを持っている。

少し進んだところでなれ合いのためにもポケモン達をボールから出してみた。

木の実をつつく俺のナエトルと氷華のポツチャマはどこかお互い警戒しているようで可愛らしい腹の探り合いをする。

わざと相手の方に木の実を押しやったり食事をいったん止めて相手をじっと見ていたり。

剛毅のヒコザルなんて氷華のギャラドスと打ち解けて川を乗り回しているくらいなのに…

「…本当に、彼等は見えていて飽きない。」

「おいデッパ、リキ助、エテ吉！そろそろ戻れ」

剛毅が彼のビッパ、ワンリキー、ヒコザルを呼び戻してボールに入る。

にしても彼のネーミングセンスはどうにかならないものだろうか。ビッパのデッパもそうだがエテ公だからエテ吉だなんて安易というか酷すぎる。

エイパムを見つけたらなんて名前にするかなんて聞きたくもない。

「いぜる、らどす！戻るよっ」

その点ではこの二人は共通しているだろう。

最後の三文字をとるだけって…

名前が三文字以下のポケモンや三文字にすると小字の所為で発音不可能なポケモンはなんて名前にするつもりだ。

「ブニャットとなんて”ニャッ”なんて擬音じみた名前になりそうで怖い。」

「ナーエ、ウソハー、コロリー。戻っておいで」

“なんだかんだ言っておきながらお前はどつなんだだつて？”

人によって価値観は違うものだから健全なウチは何でも良いと思う。只、モチーフが酷いものに関しては突っ込ませて欲しい。その所よろしく頼みます。

It was what I always wanted to say .

三人の手持ちは話が進むごとに進化したり、増えていったりします。

剛毅

エテ吉 ヒコザル

デツパ ビツパ

リキ助 ワンリキー

葉矢

ナーエ ナエトル

ウソハー ウソハチ

コロリー コロボーシ

P l e a s e n o t i c e t h a t y o u r p h y s i c a l i s

サブ翻訳『自分の身体能力が信じがたいほどのものだ気づいてくれ!』

今回も引き続き葉矢君です

Please notice that your physical is

「さ、着いたよ」

「何処に？」

「だから、本部」

氷華が目丸くするのも無理はない。

俺たちの本部は普通の人間に感知されることがないよう、地下通路のさらにしたまで掘り進んだところにあるからだ。

無論、地表からは入り口なんて普段使っている者すらレーダーを使って探知しないと見つけれないほど。

「まあ見てなつて。お前入り口見たらビビるぜ？」

目をごしごしとこすって必死に入り口を探す氷華の足下に葉っぱカッターの葉を突き刺し、上手く刺さる位置を探す。そこそが出入り口の蓋のフチなのだ。

「氷華、どいて。ここ開けるから」

「あつ、うん！えっ？ここ？！」

葉っぱカッターの葉を差し込むことによつて地面と蓋の間に出来た隙間に俺の意志で動かせる蔓をのばして蓋に絡ませる。

「……ふう」

この蓋は何度持ち上げても重い。氷華の体は軽かったと改めて実感

する。

蓋を開けると長い梯子はしこがある。もちろん人間の体力、筋持久力じやあ降りきることは難しい。

そう思つて剛毅を見れば腹立たしいと感じる人もいるだろう。

彼の場合ベースが人間のヒコザルなので木や梯子の上り下りは普段歩いているのと何ら変わらない様子でできるのだ。

一方氷華の具合はというと・・・

「合図してねー。いくよーっ」

と梯子の端の縦棒を両手でつかみ、その力を緩めることで一気に何段も降りていく。

俺たちがかなり降りてから着いてくるといふ形になるので正直かなり怖い。

というか君達はエイパムか。

A n e w e n c o u n t e r (前書き)

サブ翻訳：新しい出会い

毎度毎度多重視点ですみません!!!

A new encounter

「さ、着いたぜ。もう気にせず落ちてこい！」
「はい！」

最終的には梯子を蹴って氷華は飛び降りた。高さ十メートル弱から飛び降りるだなんて俺にそんな勇氣はない。

「かえったか。剛毅、葉矢。そいつが今回保護するポツチャマなのか？」

「おう、なかなかのじゃじゃ馬さんで手こずったぜ」

ここから氷華視点

私達を迎えたのは私より少し上くらいの少年だった。

だが彼の出で立ちには少々人目を引く物がある。

まず、大きな羽。ズバツトのものだろうか。

それに次いで頭に生えている二つのピンとがった耳、そして目に幾重にも巻かれた目隠しの布があまりにも私の中の常識から外れており、面食らってしまった。

「なんだ、人のことじろじろ見やがって。穴が空いてもおかしかねえぞ」

「いえ…」

「この変な人は羽山影惟^{はやまかげのぶ}。ポケモン部分はズバツトで、何処に隠れても場所を感知されちゃうんだ」

「大抵暇してつからとりあえずなんかあったら頼れ。なんだかんだ言っただけで助けてくれっから」

「お前ら、曲がりなりにも年上のヤツに対する態度がそれかよ…」

「影惟はアジトを広げることと、洞窟とか暗くて危なっかしいところの探索を任されてるんだ」

「ズバットの超音波・聴覚で探索が他の誰よりもより早いんだぜ」

「ああっそ。じゃ、俺たち報告行ってくるからこの子を案内してあげていてね」

「なっ、おい！ちょっとまで、葉矢！剛毅！」

「そいつに何かしやがったらロリコン疑惑を偵察部隊全員にばらまくからな」

「ぎっけんじゃねえ！」

なんというか、有能なのに立場が低そうな人だ。

T h e y a r e n o t m y p a r e n t s b u t w h o g a v e

サブ翻訳「彼等は私の親ではないけれど、産んで、ポケモンをくれた人たちの」

They are not my parents but who gave

「おい、ポツチャマ」

「何」

「お前、親から名前はもらってるか？」

「親が私生まれたら付ける予定だったと聞いた名前ならあるけれど、その名前は名乗ったことはない。今のところ使ってるのは名字くらい」

「もらってはいるんだろ？羨ましい限りだぜ、贅沢言つな」

「羽山は……」

「ま、人それぞれか。んじゃ、名乗りたい方の名前を教えてください」

「鋼屋氷華」

「れいとうビームでもくらいそうな名前だな」

「兄妹と一緒に考えた」

「お前とお前の手持ちは無教養でもないんだな」

「両親が残したのは本と字の読めるポツチャマだったから、二人で勉強して、家を出てリッシ湖の湖畔に移り住んだ」

「・・・お前は、親を恨んだことは無いか？」

「何で？」

「お前のことを、放棄したんだぞ」

目隠しのせいで羽山の表情ははっきりとは分らないが、彼が親に抱いている思いは軽いモノではないらしい。

「でもいろんなモノを残してくれた。それに、私は彼等を知らないから…彼等についてどうこう言える筋合いなんて無い」

「もらった名前は名乗らないのか？」

「育ててくれた人は親だけど、そうじゃない人たちは私にとって親じゃない。だから知らない人たちからもらった名前は名乗れない…」

「お前は…」

「羽山は、何で親のことにこだわる？」

「…気にするな」

異端者わたしたちの身の上のことだろうから何となく分からないでもない。

きつと、人に話しづらい何かがあるのだろう。

それは異端者である限り剛毅だって葉矢だって同じようなことなのだろうと思う。

もっとも彼等は表に出さないが。

羽山に案内されて回ったこのアジトはとても広かった。

こんな規模のモノが私達の足下にあっただのかと思うとある種の恐怖感のようなモノがわく。

幼くして親に棄てられた同胞達を拾い、彼等に十分な教養を与える教育施設まで在ったのだ。

The "Mechanic of steel", M

サブ翻訳：”鋼のメカニックス”、レアコイル

「ここは…元々誰が始めたの？」

「オレは会ったことはねえがカントー地方の最強さんだよ」

「カントー地方？南の方の？」

「ああ。だが、とんだ自由人らしくてよ、此処のトップは違う人がやってるぜ」

その人は、どんな思いで此処を作ってくれたのだろう。

此処までするということは、その必要があったとふんだからではないのだろうか。

「ほれ、着いたぜ。此処が研究室だ」

最後に連れてこられた部屋は所謂【現代科学で実現できつる限りの最新設備を搭載した】研究室だった。

というか俗世間を殆ど見たことがない私がある場所を形容できる言葉はその他にない。

見たこともないようなモノがたくさん並んでいて、私はただただ啞然とするのみであった。

「あら、影惟君。貴方また案内係を押しつけられたのね。その子は？見たところ水系ね」

何人もの電気タイプやエスパータイプと思われる研究員が自分たちをしていることに没頭する中、頭の回りに銀色の丸いポケモンが飛

び交っている眼鏡の女性が私達に気づいて話しかけてきた。

ねじの形をした耳飾りと鋼のような質感をもつ色をした髪の毛と瞳、そして大きな丸い眼鏡がとても印象的だ。

なんというか、硬質な色彩が一番際だっている。

彼女は唯一この研究室で機械に混じって鉄色をしていながらも決して此処の空気に埋もれては居なかった。

「コイツは今日葉矢達が保護してきたポツチャマだ。名前は…」

「は、初めまして。鋼屋氷華…です」

「敬語を使い慣れてないなら無理しなくても良いわよ、氷華ちゃん。私は西蘭磁琉生子さいおんじルイコ、レアコイルなの。よろしく」

「てめっ、オレには敬語めきやがったな！」

「あら、大人気ない。生き物は野生に近ければ近いほど尊敬に値する人物っていうのを本質的に見極める力があるのよ」

「オレは値しないってのかよー！」

「いや…その…剛毅達が『ズバツトの人にはあんまりへりくだらなくていい』って…」

「あいつら…」

「もう、そんなんだから後輩達にも下に見られちゃうんじゃないの」

彼女が羽山と話している間にも鉄色の丸いポケモンが私の周りです規則に飛び回っている。

時折止まって手の部分と思われるU字型磁石をこちらに向けてくると、少し気分が悪くなって指先がぴりぴりする。

「このポケモンは…西蘭磁…さんので…すか？」

「うーん、この子達は厳密に言うとは違うのよね。私の分身みたいな？私と意識が少し繋がってるの。もしかして気分悪くなっちゃった？この子達、磁波をゆがめて飛んでるから電磁波に慣れてなかったり敏感な人はそうみたいなのよね…ごめんね？」

「いえ…」

「このヒト、優しそうだななんて思ってたねえか？氷華ア…お前この女が実際に請け負っている部門がなんだか考えてみるい…一日中機械いじって修理したり作ったり改良したりしてんだよ。人呼んで「鋼のメカニック」様々だけ。対人なんてまともになってるわけがねえ。ほっとんど初めて見る種類の異端者^{ヤツ}への好奇心だったの」

「影惟君、余計なことを耳打ちするんじゃないの」

「ケツ、スルーしてくれい」

ってなわけでルイちゃん登場です。

頭の周りでコイルが飛んでいます。

設定 銀髪を肩胛骨の下あたりまでに伸ばしてハーフアップにしている。身長はやや高め。今時珍しいまんまる眼鏡。本部に引き取られるまでは電磁波を操って周りの機械を壊しまくる手の付けられない子だった。なぜか電磁砲が使える。

The " Foresight Vision of disaster

サブ翻訳『「未来の災いを視る者」アブソル』

「帰ったぜ、同胞を連れてな」

剛毅が報告をしに来た相手はその小さな部屋の真ん中に置かれた事務イスを陣取る一人の白と藍色の異端者。

「・・・おかえり、剛毅に葉矢。私の予想通りポツチャマだった？」

彼女は顔を上げることもなく淡泊に答える。

「はい！班長の読み通りでした。何故班長は種族まで分かるのですか？」

「かしこまらなくて良いよ、葉矢。只の勘さ。連れてきていないところを見ると今頃どこぞのズバットにでも案内させてるのかい？」

少し、口角を上げて若葉色の少年の質問をあしらう。その臉は二人の少年が入室したときから閉じられたまま。だが、その答えに朱の少年は低く言葉を返す。

「...その勘が何回続いてんすか」

「私がアブソルだからかな？なんとなくだよ」

だがその言葉にも、藍色の少女はその場しのぎのように目を閉じたまま、人差し指と親指でさいころを弄びながら答えた。

「アブソルって確か災いを予知するポケモンでしたよね」

「剛毅にしては鋭いね、何か引つかかることでもあったのかい？」

少女の口角が元の位置に落ち、閉じられていた目が開く。
さいころを弄ぶ人差し指と親指も制止する。

「・・・何でも無いッス」

朱の少年が、藍色の声ににじみ出る迫を感じ、引き下がった。

二人の少年が部屋を去り、中央の椅子に座る少女はまた一人になった。

彼等の足音が十分に離れるまで待つと、彼女はやっと一息付けるのだ。

「クスッ、何はともあれ良くやってくれたよ。未来の殺人鬼を野放しにするところだった・・・」

――

「おい氷華、大丈夫か」

「...じめん」

私はその後、ぼうつと影惟カゲノブと琉生子ルイコの会話を聞いているうちに倒れ

てしまったらしい。

「お前、機械とかの電磁波に敏感なんだな」

「うん…頭が、ぼつつとしてくる…」

「ずっと世俗から離れて生きてりゃ慣れねえよな」

「…」

今居る場所は寝台が四つ並んでいて、私は一番ドアに近い方の寝台に寝かされている。
影惟が運んでくれたのだとか。

「ガラッー」

葉矢と剛毅が入ってきた。

剛毅はけだるそうな表情で眉を少し上げながら口を開く。

「よう、ノブ」

「略すな！」

「お前…やっぱロリク」

「違う！断じて違う！」

「言い過ぎだよ、剛毅。大丈夫、俺は人の趣向を否定するつもりはないから」

「だから違うつってんだろ！誤解だ！」

「氷華、無事か？お前の貞さ」

ーばしっー

影惟のつばさでうつが私の横に来た剛毅にクリーンヒット。
さすがに剛毅もやり過ぎたと反省しているらしい。

The handled item. (前書き)

サブ翻訳『渡された物』

The handled item .

「紫音^{シオン}、呼んで欲しい子がいるんだけど」

藍色の少女は、誰もいないはずの空間に呼びかける。

「それはアジェーアの少女？インディゴの言葉にウイステリアは答え
ます」

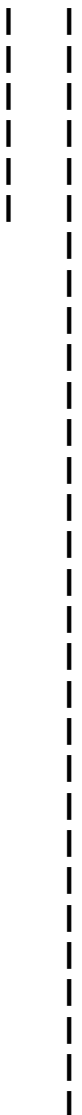
突如藍色の傍らに現れた藤色の少女は問う。

「察しが良いね。やっぱりあの子は紺碧^{アジエア}か、頼めるかい？」

「ウイステリアは確認します。それは北の原点、三色の異端の内、
青の少女？」

「でなけりゃ呼び出しはしないよ」

「了解です。ウイステリアは実行します」



和気藹々としていた仮眠室にて

「うぐっ…」

氷華が、突如呻いた。

「氷華?!」

彼女に駆け寄る剛毅を、葉矢が制する。

「剛毅、落ち着いて」

「なんだよ!おい、はなせッ」

「“呼び出し”だよ」

頭を抱えてうずくまる氷華の額に開眼するように紫の宝玉が現れる。

「うっ…うっ…うっああああああッ!」

白目が黒く濁り、瞳はこもったように白く光る。

すると氷華は意識が断絶されたかのようにぴたりと叫ぶのをやめ、
ゆっくりと立ち上がった。

「こいし颯さん…ですよな?」

「…厳密には精神のみであるとウイステリアはヴェルジュエに答え

ます」

「班長の差し金か…てめえ、そんな強引に身体奪うこともねえだろうが！」

「アジエーアの精神が痛みなしに乗っ取れるほど気迫で脆弱ではなかったためであるとウイステリアはヴェルミリオンに答えます」

今にも自分の班長の元へ乗り込まんとする剛毅を制しつつ、葉矢は氷華を見送った。

急に眠りから覚めたように視界と意識を取り戻した私の目の前にいたのは初めて見る人。

薄暗い部屋なのに、相手の白い髪と上着だけでなく側頭部にはえる藍色のツノ（？）までもがはっきりと見える。

「初めましてだね、ポツチャマ。君の名前を覚えてくれるかな？」

「だ…誰？」

「私は葉矢達が所属する班の班長、しらかわアイ白川藍」

一歩近づいてくるごとに白川の迫力は倍増した。

白と藍色でも構成された中に深紅の目が私の視線を釘付けにする。

「あ……」

「だから、名前を覚えてよ。紺碧の原点さん」

「は、鋼屋氷華」

相手の言ったことの意味は理解しかねるが、ここで彼女の意図に反した行動を取れば殺される気がした。

「ふうん…また随分と種族を意識した名前だね」

そつつぶやくと、白川は真っ白なズボンのポケットから桃色の薄い機械を取り出した。

「氷華、コレを君に。出会ったポケモンや異端者を記録していく機械、ポケモン図鑑さ。こいつを所持できるのは各地の“三色の原点”だけ。君こそが私が探し続けた北の最後の原点、青なんだよ」

「えつと……?」

「異端の図鑑所有者、北の最後の一角がみつかったよ…ソレはいずれ西の、南の原点達との絆にもなるだろう。だから決して手放さないでいて欲しい」

「…はい」

「良い返事がもらえて嬉しいよ」

—————シンオウ地方、異端の凶鑑所有者がそろった。

The handled item. (後書き)

ヴェルジュエ〓草木などに用いる緑色の表現

ヴェルミリオン〓朱色

アジェーア〓紺碧、青色

ウイステリア〓藤色

インディゴ〓藍色

一 颯紫音ちゃんに関しては、次らへんで…

My purpose of cooperation (前書き)

サブ翻訳 私が協力する理由

My purpose of cooperation

「ウイステリアは陳謝します。契約のため、凶鑑譲渡のためとはいえ精神いえ、肉体を乗っ取ったことに対して。申し訳ありません」

白川の後ろから声が出たので急遽そちらに注意を向けると、黒目である位置が白く、白目が黒い藤色の異端者が居た。

とはいえこの部屋から出入りする物音はなかったのではじめからそこにいたらしい。

白川藍に圧倒されすぎてもう一人その場にいることにすら気がつかなかったのだ。

「貴方は…」

「一颯紫音いばきシオン。自分はエーフィの異端者であるとウイステリアは名乗ります」

「そうだ、凶鑑を渡すついでに初仕事を頼めるかい？」

「ええっ・・・と？」

「葉矢達に言えば分かるから」

「は・・・はい」

「ウイステリアは手短に話します。ソノオタウンの花畑周辺の林に不審人物。人外を利用してしている模様。ウイステリアはアジェーアに伝言を要求します」

「ソレをそのまま葉矢達に伝えればいい？」

「付け足し。行動はなるべく人に対しては秘密裏に」

「わ、わかった」

「ウイステリアは同行する許可を要請します」

「・・・森の方で？」

白川が一颯を見る目つきが変わった。

『何を期待してんだ』とでも言っているようだ。

「…まあいいや、私に見えるのは災いだけ。幸運なんて予測できないよ。勝手に行くといい」

「ウイステリアは…恐縮…です…」

「ふーん、ソノオねえ…」

「へたしたら花粉症にでもなりそうな町だよな」

「えっと…どんなところなの？あと、仕事の内容って…」

「ん？簡単に言うと不審者とドンパチやって利用されている同胞を組織（じゅうし）に引きずり込む」

「剛毅、説明がそのまんますぎるよ……」

「間違ってはいねえだろ」

「そーだけどさあ！」

M y p u r p o s e o f c o o p e r a t i o n (後書き)

次回からシンオウ原点組+エーフィのチームが動きます。
不審者!!ギンガ団でおk

The "PSI controller of sun"

サブ翻訳 『太陽の超能力者』 エーフィ

このソノオタウンという町は悪く言えば剛毅が言ったとおり花粉症になりそうな町。

良く言えば、いや、ひねくれた見方をせずにいれば、美しい花畑の町だ。

「ウイステリアは要求します。一度に三人のテレポートはさすがに堪えたのでしばし休ませて欲しい、と」

「ケツ、率直にストレートに普通に言えっつての。つかれたからやすませろーって」

剛毅が追い払うような仕草を見ると、一颯はどこかへ去っていった。

そこは、思わず深呼吸をしたくなるほどの澄んだ空気で満たされている。

語彙が貧弱な私にはせいぜい木々のユートピアとしか言いようのない場所。

地名は、ハクタイのもり。

私がここに来た理由は一つ、それはあの藍色インブルーとの契約に関係すること。

私は彼女に兄妹達イーブイ系を自由に探すことを可能にする代わりに彼女に協力すると誓約をかわした。

なにせ兄妹達はばらばらに点在しているため私個人の力では思いあたる場所総てを回ることができないため、彼女の権力を盾に自由に搜索をさせてもらうしかなかった。

その代わりにの丁稚奉公ていぢほうこうだ。

私が此処に着いてきた理由、それはこの森のどこかにイーブイの進化ポイントがあったから。

そこで進化するイーブイは確か…

「またお前らか、このピチピチタイツ宇宙人」

「懲りないね、ポケモンバトルでなら勝てると思った？」

「甘いよ／＼甘えよ」

「所詮人外のガキどもが！お前らの戦闘能力はともかく、ポケモンバトルなんかする脳がどこにあるってんだ！」

双方、ポケモンを繰り出す。

ピチピチタイツの変質者側からはニャルマー、スカンプー。

剛毅&葉矢ペアからはビツパとウソ八チ。

「ケツ助かったぜ。いくら俺でも連中とバトるのはゴメンだからな」
だがそのまま他人のものとと思われるポケモンを抱えて逃走するピチ
ピチタイツの変質者が一名…

「どこに行くつもり」

彼の腕を、冷たく白い少女の手がつかみ上げる。

「他人の家族を奪ってまで何がしたいの」

「っは…はなせっ」

「聞いてる？」

見れば、少女に捕まれた部分がどんどん凍っていく。

「うわあああっ、このっ、バケモノがッ!!」

その台詞を聞いたとたん、何かのスイッチが入ったのか、氷華の瞳
から情の色が消えた。

「何だ…お前、黙りやがってえええええええ?!」

氷華は、躊躇無く凍った男の腕をばきりと肩口から独立宣言をさせ
る。

凍った腕は、男の痛覚を奪ったままカッターナイフの刃でも折るよ

うにあっけなく外れた。

The "PSI controller of sun"

主人公ちゃん：世俗離れしてる所為で躊躇ねえ…

道徳的な考えという基盤が染みついてないんだ…

怖い、怖い

What do you need to understand about

サブ翻訳 君がちゃんとわかっているからいなければいけないこと

What do you need to understand about

「跳べッ！デッパ」

「ウソハー、げんしのちから」

ウソハチが地面を強く蹴り、相手のスカンプーの足下からその震動で石や土が跳ね上がる。

「クツ…一瞬で戦闘不能かよ」

「まだ俺のニヤルマーがいるぜ！みだれひっかき！」

相手の攻撃に対し、葉矢は呆れ顔。

「ウソハチを何タイプだと思ってるわけ？」

「デッパ、ひっさつまえば！」

落ちてくる勢いに載せてビッパがひっさつまえばをニヤルマーの背に当てる。

無論、一撃で戦闘不能だ。

「オラ、とつとと略奪したモノおいてけよ」

「戦っても勝てないことぐらい分かっててやってる？」

二人の少年は、余裕の表情でピチピチタイトツの変質者、もといギンガ団の下っ端に退却を促す。

「さーてと、氷華ー！待たせちまったか…っ…お前！」

剛毅の目に映ったのは、大量のモンスターボールの入ったかごと…凍った人間の腕を片手に持った水色の少女。

「…」

剛毅は何も言わず、彼女の頬を張った。

彼の悲しそうな、怒っているような、泣きそうな視線に気づき、氷華は持っていたモノを取り落とす。

「あ…わたし…なにを…」

ギンガ団の下っ端はもう逃走済で、彼女が持っているのは腕だけ。

だがそれは、剛毅にとって直視し辛いものだった。

「剛毅、後でこのポケモン達を持ち主の人たちに返そうねって…氷華？」

先ほどまで人の腕をつかんでいた右手を左手で握り、がちがちと歯を鳴らして震える氷華。

「（わたし…初めて人を…壊した…？）」

葉矢は、何も言えずに後ろを向く剛毅を押しやり、氷華の手を両手

で包んだ。

「ちゃんとわかったね？初めて人を壊した感覚。自覚したら怖かった？自分の力がどういうモノか分かったよね？こんなに震えて、自分でも怖かったでしょ？」

葉矢は氷華を落ち着かせると、先ほどとは打って変わった強い口調で氷華をたしなめる。

「でも、それはいけないことなんだよ」

「うん…」

「何、人外に負けたって？」

「ハ、ハイ…奴ら、ポケモンのレベルを上げておりました」

「あたしは言い訳を聞いてやるためにいるんじゃないよ」

赤毛の女が厳しい一言を放つ。

「アンタはどうしたんだい。左腕の肘から先は何処にやった」

「水系の人外に…凍らされて…」

「水系…ねえ…」

女は冷たい笑みを浮かべる。

それは先ほどまでの部下への嘲笑とはまた違ったもの。

「相性抜群じゃないか…」

What do you need to understand about

作者が一番好きなギンガ団幹部はマーズだったりする。
可愛いじゃん、あの子。

Heading to a battle (前書き)

サブ翻訳 『戦いに向けて』

今回のスタートは紫音ちゃんです

Heading to a battle

森の中を暫く歩き続けると、大きな苔生した岩が見えた。

岩の上にテレポートしてみると、案の定岩に寄りかかって寝ている二人の異端者がいる。

まだ幼い姉弟のようだ。

一人はふわふわしたマフラーを巻き、頭から大きな茶色の耳がはえている。

マフラーと同じ色の尻尾から、まだ進化前のイーブイのようだ。

もう一人は植物の葉のような耳を生やし、となりで寝ているイーブイに身体を預けさせている。

弟と思われるイーブイの手元にあるかじりかけのオレンの実から、この二人がこの森で細々と生活していたことが分かる。

「起きるまで…ウイステリアは見守ることにします…」

岩の反対側に降りて、そろそろ来るであろうと予知したG団の下っ端を迎え撃つ準備をしよう。

<ガサツ>

「ウイステリアは以外と好戦的なのです」

「氷華、戦う準備はできてる？」

「え……？」

「連中が走っていった方向、プロペラが立っているところを見るに
おそらく風力発電所。今回の奴らの拠点らしい」

「……うん、大丈夫」

「氷華、お前は異端者同士が戦う際のルールを知ってるか？」

「えっと……ダブルバトルだっけ？」

剛毅の表情は安堵の色を見せる。

「そうだ。ノブから聞いたのか？」

「うん……」

異端者同士のバトルのルールは至極単純。

異端者が自分のポケモンと共闘するのだ。

つまり異端者の一対一のバトルならば一人と二匹VS一人と二匹と

いう風になる。

ポケモンをサポートに使ったり、自らがポケモンをサポートしたり、それぞれソロで戦ったりと人によって様々な戦い方があるというわけだ。

「じゃ、行くか」

「うん」

「俺も久々に暴れようかな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941v/>

ポケットモンスター ~とある人外達の奮闘記~

2011年12月18日00時51分発行